

### アジア諸国との連携について

— ICP2016 に向けて

理事長には具体的な担当業務はありませんので、先期から力を入れてきた問題でもあり、「またか!」と言われそうですが、日本心理学会と世界の心理学界、特にアジア各国の心理学会との関係について書いてみます。国際関係、特にアジア諸国との関係に力を注いでいる一つの理由は、二年後、日本（横浜）でICP2016（31st International Congress of Psychology, 第31回国際心理学会議）を開催するということがあります。この学会は、IUPsyS（International Union of Psychological Sciences, 国際心理学連合）という世界各国を代表する心理学会の連合体と開催国を代表する学会（日本では日本心理学会）が共同で四年ごとに開催するもので、心理学では世界最大規模の国際会議です。前回は2012年7月に南アフリカのケープタウンで開催され、約5000名が参加者しました。横浜では7000人程度の参加者を見込んでいます。IUPsySには、世界80カ国・地域を代表する学会が加盟しています。各地域の連合体も準会員として加盟しており、アジアからは、東南アジアの心理学会の連合体であるASEAN心理学会連合（ASEAN Regional Union of Psychological Societies, ARUPS）が加盟しています。

東アジアには連合体はありませんが、前号の巻頭言でもご紹介したように、日本心理学会は、中国、韓国、台湾と友好協定（MOU）を結んでおり、交流の枠組みだけはできています。東南アジアに関しては、2012年マレーシアと、2013年の10月にはフィリピンで開催されたARUPSの大会の際に、フィリピン、インドネシアと協定を締結しました。また、2013年9月の日本心理学会大会に、インドネシア、マレーシア、フィリピンの代表者を招き、アジアの心理学会の現状に関して有益な話し合いを持ちました。

アジア各国の心理学会の規模（会員数）は、いくつか例をあげると、中国3200人、韓国6500人、フィリピン1500人、マレーシア200人、インドネシア13000人とまちまちです。中国が案外少ない、インドネシアがすごい!とい

う感じですが、中国は地域や分野を代表する人が会員になるというような構造があるようですし、インドネシアは人口が2億を超える大国ですから、当然かもしれません。

最後に、アジアにおける心理学の教育・研究の内容に関する、個人的な印象を書いてみます。中国、韓国、台湾は主要大学の教授陣はアメリカでPh.D.を取得した人が多く、先端的な部分の水準は非常に高く、アメリカ的であり、日本人から見ても判りやすく、シンガポールも似た状況です。フィリピンの心理学は、アメリカの実用的な心理学が導入されており、実際に大学で心理学を学んだ後、企業の人事・教育系の仕事に就く人が多いということです。マレーシアは教授陣が英国人、英国で教育を受けた人々であり、英国の影響が強い印象です。東南アジアの心理学全体に、アメリカ、英国、オーストラリア等の大学との関係が強く、そうした国々のほうばかりを向いているため、日本からは全く見えてこないという印象があります。また英語で教育が行われている大学も多く、二年間学んだ後にアメリカ、英国、オーストラリアの大学に編入するという制度もあり、アジア諸国からの留学生が急増中とか。日本の大学も英語で講義をしないと将来、対抗できなくなるかもしれません。研究活動の指標として、APAの論文データベース（PsycARTICLES）所載の論文数を見てみると、日本414、韓国148、中国343、台湾142、香港373、シンガポール157、マレーシア15、フィリピン24、タイ22というところ。台湾、香港、シンガポールの健闘が目立ちますが、東南アジアはまだまだこれからという感じでしょうか。

とにかくここまで、交流協定という入れ物づくりに励んできましたが、こうした多様性のあるアジアの心理学と日本の心理学との交流をどう実体化していくのか、ICP2016をアジア諸国との交流を実体化する機会として活かしていくにはどうすればよいのかと頭を悩ませております。アジアとの交流の実績をお持ちの方、関心のある方、そういう方々のお知恵とご助力を頂ければ幸いです。

（理事長・東京大学教授 佐藤隆夫）